

近代経済社会の形成と顕幽二元論の成立

産須那神概念を媒介に

山崎 好裕

福岡大学経済学部

WP-2021-003



福岡大学先端経済研究センター

近代経済社会の形成と顕幽二元論の成立：

産須那神概念を媒介に

山崎 好裕

概要

福岡市東区和白に産素根神社という神社がある。明治13年に久保田エイという女性が神託を受け、近所の高塚神社の神を祀る信仰を創始した。当時、近代化の波が同地域を洗っており、地域経済が大きく変化していくなか、民衆の信仰世界は変わらぬまま取り残されていた。たとえば、天理教の中山みきや大本教の出口なおと同じく、久保田エイもまた地域民衆の不安を受け止めるかたちで新たな信仰を始めたのである。当時は、日本の宗教行政も大きな変化のなかにあった。当初国教化の動きに対応する姿勢を見せた神道界も、分裂と教派神道諸派の独立の渦中にあった。久保田エイの教団もまた、神道本局、神理教と所属を変えることで存続した。近代神道の根本には後期国学から発した、平田篤胤の復古神道思想があった。篤胤に学んだ六人部是香は、篤胤の顕幽二元論を発展させて産須那神学とでも言うべき体系を築いた。死んだ後の幸福が生前の行いによって決まり、それが産須那神によって差配されるという教義は、近代民衆の安心感に繋がっただろう。神理教教祖の佐野経彦は、祖先神にして先ず寄るべき神として産須爾神を中心とする信仰体系を構築した。それは近代日本人の地域の神社参拝を習慣化させ、家の宗教としての神社神道を定着させた。

JEL 分類番号：B190, N950, R110。

キーワード：産須那神、久保田エイ、明治神道界、六人部是香、佐野経彦。

The Development of Modern Economic Society and the Establishment of
Dualism of this World and the Next:
Using the Concept of Local Gods as a Clue

Yoshihiro Yamazaki

Abstract

There is a shrine named “Ubusune” in Wajiro, Higashi-ku, Fukuoka, Japan. Ei Kubota, a house wife, suddenly received a divine revelation in 1880. She started a new religion where people worshipped “Takatsuka” shrine near her house. In those days, the big wave of modernization reached the local area in Kyushu island. However, people’s mental world was left unchanged. She was one of female founders of new religions like Miki Nakayama of Tenri-kyo and Nao Deguchi of Omoto-kyo. Meiji government was also in the middle of a big transformation of its religious policy. Shintoism was divided into two parts and new sects were becoming independent of the mainstream Shintoism. Ei Kubota’s group managed to survive belonging to the mainstream Shintoism first and to Shinri-kyo after that. Modern Shintoism’s backbone was the restoration Shintoism by Atsutane Hirata. Yoshika Mutobe, a successor of him, developed Hirata’s dualism of this world and the next. He established the theology of “Ubusuna” which meant local gods. Mutobe gave people a peace of mind telling that the local gods watched the behaviors in these lives and blessed good people in the coming lives. Tsunehiko Sano, the founder of Shinri-kyo, built the system of religion where local gods were the most important as ancestors of local people. This thought confirmed the habit of visiting local shrines. Thus the shrine Shintoism has become very popular family religion among Japanese people.

JEL classifications: B190, N950, R110.

Keywords: local gods, Ei Kubota, Meiji Era’s Shintoism, Yoshika Mutobe, Tsunehiko Sano.

はじめに

国道 59 号線を西に向かって車で走ると、左側に福岡市東区和白 5 - 14 - 5 に立地する産素根^{うぶすね}神社の広告塔が見えてくる。鎮守の森の社を意味する産土^{うぶすな}神と異なる漢字が使われている。素の文字をスと呼んで神道神学的な意味を与えることは、明治時代以降行われている¹。根の文字は、幕末の後期国学が復古神道思想に展開していくなかで、産土神についての神学的解釈が行われるようになり、その議論において表記に使われるようになってきた。

本稿は、この社名に表された明治期の神道学説の変遷を探り、そのなかで九州北部の地域において神道系の信仰がどのような展開を見せたのかを解明することを目的にしている。明治というのは、言うまでもなく日本の経済と社会が急速な近代化を遂げていった時代である。物質的な変化の速さに比べて、地域住民の宗教的観念を含む精神世界の変化は緩慢なものであったことだろう。その軋轢のなかに、信仰の新たな形態が生成してくる機縁があった。

当時の素朴な精神構造を想像してみるに、物質世界が近代科学の光に照らされて脱神秘化が進んでいくなか、この世ならぬ死後の幽界に安心立命の根拠を求めるものであったと考えられる。こうして幕末平田神学が切り開いてきた顕幽二元論が求められることになる。そして、顕幽二元論は産土神信仰の普及を通じて、各地方の地域に根を下ろし、この世と隔絶したあの世という現在まで続く一般的な世界観を確立することに繋がった。

まず、現産素根神社が成立する過程を、明治期の神道を取り巻く環境と相即させながら論じたい。次に、産土神思想の嚆矢である六人部是香の神学を論じる。その上で、是香の議論を発展させていった神理教教祖・佐野経彦の産土神論を、是香の立論との比較において見ていく。

1. 明治期の神道界と産素根神社

明治 13 年のことである。現在産素根神社の立つ地に住んでいた久保田エイは、自宅からほど近い和白干潟で貝掘りをしていた。そのとき、突然の神のお告げがあり、エイは気を失ってしまう。お告げは、荒れ果てた高塚神社を復興してくれまいか、という内容であった。

¹ 明治時代の神道神秘主義者である大石凝真素美が、その名にこの文字を用いている。大石凝の言霊思想については、拙稿「近代経済発展期における合理的神秘主義思想：大石凝真素美の日本言霊学を事例に」(www.econ.fukuoka-u.ac.jp/researchcenter/workingpapers/WP-2020-013.pdf)を参照されたい。

福岡地域を近代化の波が洗うなかで、従来の信仰が失われていたのである。エイにもたらされた神のお告げには、こうした急激な変化に対する民衆の戸惑いと近代化の持ち来った弊害に対する怒りが象徴的に表されている²。



図 1 久保田エイ

高塚神社の祭神は宇迦之御魂神であった。そこで、エイは京都伏見稲荷大社まで、徒歩で参拝し、あらためてその分霊を勧請してきて高塚神社にお祀りした。エイが受けたお告げのことは近隣で評判となり、多くの人々が信者となってエイの家を訪れた。これは警察の咎めるところとなり、宗教行為を止めるように圧力がかった。エイは布教を公認してもらう必要に迫られたのである。

エイがお告げを受けた明治 13 年は、実は明治神道史上でも画期となった年である。明治の神道の歴史は、慶長 4 年の太政官布告によって神祇官が復活されたことに始まる。明治 3 年には大教宣布の詔が出されて、国民を神道思想で教化するために宣教使制度を設けることが決められた。これらの、あまりにも神聖政治的な体制は急激に衰退し、明治 5 年に教部省が設置されると、こちらに宗教政策の権限が移された。教部省は明治 6 年に 14 階級からなる教導職制度を開始し、教導職には神職や僧侶他の雑多な人員が充てられた。また、教部

² 現在も神社宮司を務める、エイの子孫である久保田家各位からの聞き取りによる。

省の外郭団体として大教院が設置されて国民教化の中心として機能し始める。浄土真宗の島地黙雷らがこの大教院を批判して去るなかで、明治 8 年に明治神道界の主だった面々によって神道事務局が設立された³。

この神道共同体制を崩壊に導き、教派神道の分離独立に道を開いた出来事こそ祭神論争である。祭神論争は神道事務局神殿の祭神を、大教院を引き継いで天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、天照大御神の 4 神にしようとしたことから始まった。これに出雲大社大宮司で出雲国造の千家尊福が、幽界主宰神である大国主神を合祀すべきであると異を唱えた。元薩摩藩士で伊勢神宮大宮司であった田中頼庸がその必要なしとして対立した。論争は出雲大社派と伊勢神宮派に神道界を二分した。さらに、明治 13 年に神道東京分局長の本居豊頼が神道事務局保護方之激を内務省社寺局長の桜井能監に送致し、論争に油を注いでいる⁴。明治 13 年に明治神道界は、祭神論争の混乱の只中であつたわけである。

そのようななか、明治 15 年には、神社神官が教導職を兼任することが禁止される。さらに、明治 17 年には教導職制度そのものが廃止された。これは神道の布教を国家が直接行うことを止めたことを意味する。神社は国家の保護の下にひきつづき置かれたが、宗教活動は政治から分離された。逆にこのことが、宗教としての神道が教派神道諸派として分離独立する機縁となった⁵。

教派神道 13 派のなかで、明治 9 年と独立が異例に早い黒住派と神道修成派を除けば、ほとんどが明治 15 年に独立を達成している。神道神宮派、神道大社派、神道扶桑教、神道大成派、神道神習派に黒住派を加えた 7 派が、同年の内に派名から教名に切り替えている。また、神道大成派からは、やはり、明治 15 年の内に御嶽教が分離した。明治 15 年に一派独立が相次いだのは、先に述べた神社神官と教導職の分離が決まったためである。教派神道各派の教長は、神道実行派を除けばすべて神社の宮司であつた⁶。

各派が独立したことに、神道事務局は対応を余儀なくされた。明治 17 年、神道事務局には初めて管長が置かれ、山城淀藩の最後の藩主・稲場正邦が就任した。明治 18 年には分局長、直轄教会長を招集して神道教規を策定して、教団としての形式を整えていった。翌明治 19 年に教規が政府から認可を受けることで、神道事務局は解散して 1 教派としての「神道」、通称神道本局が成立した⁷。

天理教教祖・中山みきのケースを見ると、久保田エイが当時置かれていた状況も推測できる。みきの場合は、奈良警察署や丹後市分署から頻繁に布教活動への干渉を受け、祭祀具などの差し押さえ、罰金、留置所拘留などの処分を受けている。とりわけ、明治 15 年以降は

³ 井上 (1991)、18-22 ページ。

⁴ 戸浪 (2013)、189-190 ページ。

⁵ 井上前掲書、27-29 ページ。

⁶ 同上、32-33 ページ。

⁷ 同上、38-39 ページ。

取り締まりが強化されている。みきは政府からの布教公認には反対であったが、教祖最晩年に教会設置に向けて動き出した。みきが明治 20 年に亡くなると、翌年神道本局所属の天理教会として認可された。天理教が神道本局から独立するのは、明治 41 年まで待たねばならなかった。これは天理教の信者があまりに多く、神道本局が独立されるのを嫌ったからである。実際、神道本局の信者は、天理教独立によって 3 万 1 千人台から 9 千人台へと急減した⁸。

久保田エイは明治 22 年ないしは 23 年に、神道本局所属の^{じんごう}神功⁹教会を設立したようである。ただ、神道本局が東京所在のため、不便であることは否定できず、明治 27 年に小倉に本部を置く神理教が独立すると、直後に久保田エイの教会も神理教所属となった。神理教への所属は長く続いたが平成 21 年、独立して単立の神社となり、名称も産素根神社に変更された。



図 2 産素根神社

神理教の活動は、教祖・佐野経彦が明治 11 年に教義書である『神理図図解』を著したことに始まる。翌年、経彦は神道事務局から教導職試補の位を授かり、公的な布教活動が可能

⁸ 同上、43-46 ページ。

⁹ 久保田家でのヒアリングでは、功ではなく功とのことであった。

になった。明治 13 年には神理教会を開設した。経彦の活動によって信者が増えていくと、教団内から一派独立を願う声が高まった。しかし、神道本局がそれを許したため、神理教会は明治 21 年に神道本局から御嶽教へと転属し、経彦も御嶽教大教正となった。一派としての独立を支持していた副島種臣内務大臣が、当初独立を予定していた明治 25 年に辞職したために、最終的な独立は明治 27 年にずれ込んだのであった¹⁰。

2. 六人部是香の『産須那社古伝抄』

産土神に神道神学的な意味付けを施した六人部是香は、寛政 10 年、山城国乙訓郡の日向神社の神官家に生まれた。文政 6 年、平田篤胤が上京した際、鐸屋の国学者仲間の妨害にあり、それを救ったのが服部中庸と、是香の父・節香^{まだか}であった。是香は向日神社に滞在した篤胤に入門する。当初は伝統的な国学研究に従事していた是香であったが、黒船来航から始まる動乱の時代を目の当たりにして、神道神学への傾斜を強めていく。本稿で分析する『産須那社古伝抄』は安政 4 年の出版である¹¹。

篤胤が師・本居宣長に反対して、展開した顕幽二元論の世界像では、幽界主宰神としての大国主神が非常に重要視されている。是香もまた、それを踏襲している。

神代よ里して天照大御神の御裔孫は、代々至尊と大坐まして天下顕明の御政事を掌り給ひ、須佐之男大神の御裔大国主大神は、出雲大社に御鎮座ましくて、その御子孫と共に天下の幽冥乃御政事を掌り給へり¹²。

是香は幽界主宰神である大国主神の子孫を各地の産土神と同一視する。

また幽冥の御政事なす、彼大国主大神の御子孫、まさに其由緒の神々等を始めとして、其地々々に就て有功所縁ある神々を、諸国の村里に分配して鎮坐せしめ給ひ、尚また人皇と成ての後こそ、武内宿禰命菅公などの忠肝義膽の人等を、没後に彼大社にして、尊き上津大兄の尊稱にぞ、神位界に騰用し給ふれば、即尊き神明にならる故に、是等の神等をも彼産須那神等と並びて其地々々の幽冥政を掌しめ給へり¹³。

¹⁰ 井上前掲書、139-142 ページ。

¹¹ 山中 (1974)、44-45 ページ。

¹² 六人部 (1857)、新日本古典籍データベース、4-5 コマ。

¹³ 同上、5-6 コマ。

土地土地の産須那神は、幽冥主宰神である大国主神の幽冥界の統治を、各地において分掌する存在である。

されば産須那を稱すに、為産根といふ事なるを、根と那とハ、親しき通音にて、産須那とぞ稱^{まをせ}るにて、萬物を生産せしむるの根本神と申す義なり¹⁴。

是香は産霊と産須那神をほぼ同一視しており、産須那神は生産を司る根本神という最高の神格と見なされることになっている。そして、根本神たる産須那神は人々の生を審らかに把握しており、死後の人々の幽冥界での処遇を大国主神の下で定める存在でもある。

さて其産須那社に、伺候せる所の神靈等ハ、其社にして善惡に就て位を定め、毎年十月に到れば、其本府の神朝廷たる出雲大社に率き行給て、其本府の政令に任せ給へ里¹⁵。

こうして出雲大社の大国主神の下で定められる、人々の死後の処遇であるが、是香の場合、極めて勸善懲惡的な解釈が加えられる。

されば抜群の良善の人の靈魂は、拔擢せられて、天地の間の造化の幽役を命付けられ、或は萬國に係る大任をも蒙れども、其に格外の人にして、多くは元の産須那社に率て還り給て、其社の幽政に資用し給へり。但し此大任を蒙りある人といへども、其本體の精神こそ其任に趣け、別魂の尚本の産須那社に留なり。さて是反して顯世に在る程、心を惡事に用て、不忠不義不慈不孝などの、良らぬ筋の事どもを成したる人も。顯世中に厚く守護給はざるのみにあらで、其身没するに及びては、是も同じく産須那社に参集せるといへども、凶徒界と云て謂ゆる天狗の類の、妖魔の群黨になさしめ給ふことなるぞ。この凶徒界に陥里ては、種々艱難辛苦の所行ありて、永く困苦に窮厄せむ¹⁶。

是香の師・篤胤は、宣長が人は等しく、死ねば汚く穢れた黄泉国に行くと言ったのをどうしても受け入れることができなかった。それでは、死後の安心という信仰は得られないと考えたのである。そこで、篤胤は顯幽二元論を提起する。人々は死ねばこの世と付かず離れずの近さにある幽冥界に移るのであって、どこか遠くへと行くのではない。

是香は、それにさらに、生前の善行と悪行とによって死後の処遇が異なるという信仰を加えた。善行を行った人は、産須那神の下で重要な任務を与えられて仕事をする。これに対し

¹⁴ 同上、7コマ。

¹⁵ 同上、8-9コマ。

¹⁶ 同上、9-10コマ。

て、悪行を行ったものは凶徒界に入って苦しい修行をしなければ、許されて救済されることはないのである。

3. 佐野経彦の『産須爾神考』

神理教教祖・佐野経彦が『産須爾神考』を出版したのは明治 16 年のことである。当時、神理教は神道事務局所属の神理教会として、信者を拡大している最中であった。その際、祖先崇拜を強調する同書は、神理教教義の他との差別化を図っていく上で、大いに活用されたのだと思われる。

まず、経彦は、六人部是香の著書を踏まえながら、産須爾神の根源性を強調している。

さてハ此氏といふ言に深き^{なごとはり}神理のあることならむと、其言の^{はじめ}起源を考るに、産須爾といふ言にして其人の生れたる根と云ふ言なり。産須那とハ産須根といふ事にして、人の生れたる根と云言なり。¹⁷

経彦が使う文字は爾であって、是香の那ではないが、ともに元々は根であるのだとされている。

ただ、是香と経彦とで大きく異なる点がある。それは、是香が産須那神を幽冥の政を大国主神に代わって分掌している根源神であると考えてのに対して、経彦があくまでも地域の民と地の繋がった祖先神として捉えていることである。是香も産須那神を産霊と同一視する神学を展開していたのだが、経彦は産須爾神の系譜を遡っていけば、皇祖神である産巢日大神に到るとしている。経彦の神学が篤胤から決定的な影響を受けていることは間違いないが、いくつかの点で顕著な違いがあり、その一つが^{あめにますもろもろのかみ}天在諸神を徹底して重視することである。こうした天津神の重視は、逆に大国主神などの国津神を相対的に軽視することに繋がる。篤胤が、顕世を皇祖から詔勅を受けた天皇が統治し、幽世を大国主神が統治するという二元論を立てたのに対して、経彦の場合は天在諸神一元論であり、産須爾神がその系譜のなかに位置付けられる。

産須祢ハ既に云如く、産奈須祢にして目近く云ハゞ人々の親なり。其親の親と、産為根の産須根を遥り逆のぼりにかぞへのぼれば、終に伊邪那岐神、伊邪那美神より、^{ほて}極は

¹⁷ 佐野 (1883)、国立国会図書館デジタルコレクション、7-8 コマ。

産巢日大神に止り、また推下れば衆庶^{もろひと}の親に止るなり。¹⁸

経彦は、医者として皇道医学を提唱することから思想的活動を開始した。そのせいか神理教の神学のなかに陰陽五行説が色濃く影響を残している。天在諸神は日月五星の天体にまします。諸天体は陰陽五行になぞらえられる¹⁹。さらに、経彦は、排外的であった是香とは対照的に、諸外国人についてオープンであり、世界の諸人種についても自己の神学で説明を与えようとする。

この五祖神は正しく地球人種の祖神にして、産巢日神達の造化^{なまし}たまひし所謂氣化の神と交合^{とつき}ありて、許多の御子を生給ひしものなら牟。これを始として、弥廣こりに廣こり、生子^{うみのこ}の八十續ニ榮たるものなれハ、自ら世界^{あめのした}の五色の人種ある故なり。²⁰

五祖神は土火金水木の五行神と同じであり、土神・埴安姫神が黄色のアジア人種の祖、火神・軻遇槌神が赤色のアメリカ人種の祖、金神・金山姫神が黒色のアフリカ人種の祖、水神・罔象女神が白色のヨーロッパ人種の祖、木神・句々廻智神が青色のマレイ人種の祖とされた。死後の魂がどうなるかについて、経彦は和魂、荒魂、奇魂、幸魂の四魂説と用いて、是香以上に詳細かつ複雑な説明を行っている。

さて現世に人の人たる、人の道つくせし人靈ハ、善とほめさせ天神御許に召寄せ復命を聞し幸魂^{ひのわかみや}を日少宮に止め、荒魂ハ墓所に鎮めさせけれハ、和魂ハ彼産須那大神の宮に昇殿し、奇魂ハ奇しく別れて、その氏の家にも身にも、屬副^{つきそ}ひ夜の守護^{まもり}日の守護に守り給ひ、上行ハ上を守り、下行ハ下を護り、常住に守り賜ふ守護神とたゝせ給ふなり。

²¹

¹⁸ 同上、10 コマ。

¹⁹ 佐野経彦に至る神道コスモロジーの系譜については、拙稿「周回する五行：服部中庸と巫部経彦」(www.econ.fukuoka-u.ac.jp/researchcenter/workingpapers/WP-2020-004.pdf)を参照されたい。

²⁰ 同上、12 コマ。

²¹ 同上、21-22 コマ。

目に見えて現れる魂である荒魂は、死後は墓所に留まるという。墓参のときは、先祖の荒魂を拝礼しているわけである。幸魂は高天原に登って天津神に生前のことを報告するとともに、天上の宮殿に留まる。本体とも言うべき和魂こそ産須爾社に上って先祖神と合体する。子孫を近くで見守るのは、いくつにも分かれる奇魂である。是香にも魂が分かれるという説明はあったが、経彦の説明が遙かに詳細になっている。

これに対して、生前悪事を働いた人の魂は、結局安住の所を得ずに亡霊となってしまう。

然るに、もし人の人たる道にそむきたるものハ、悪とて清明の神にハなれて、黄泉國に繋ぎ留められけるにあり。其和魂の産須那の^{みくらい}神位に登る事を得ず。たまく産須奈大神の社の地に来ても昇殿すること叶わずして、或は木に憑き石に憑き風前の燈の如く、秋の螢の如く、有かとおもへハ消へ、きゆるとおもへハ顕れ、己か子孫を守護るへき自由を得さるなり。かくて子孫に災難あるを眼前に見なから救はんとすれとも、救ふ事を得さるものなれハ、其子孫の家は常住に悩み苦しむことのみが多く、^{たまぐ}適夢に^{かか}憑りても其姿を全く見する事あたはさるなり²²。

このようにして、先祖の悪行は子孫にも類を及ぼすことになる。こうした家の守りの信仰は、神理教にかなり特徴的なものである。経彦はその神学の中心である産須爾神の神徳を次のように謳い上げている。

然れハ産須根神ハ弥我祖先の神にして産須根神社ハ、即祖先の靈社にま志く、今云大神ハ謂ゆる産須祢総督の大神なる事をおもひ悟るべし²³。

おわりに

産素根神社の御祭神は^{あまつみおやのおおみかみ}天都祖之 大御神である。六人部是香から佐野経彦へと繋がる、祖先神としての産須那神という神学を考えたとき、平成 21 年に社名を産素根神社にしたことは必然的な選択であったようにさえ思える。

そもそも、久保田エイにお告げを授けた神は宇迦之御魂神であった。稲荷神と同一視され

²² 同上、22-23 コマ。

²³ 同上、23 コマ。

る宇迦之御魂神は食物神である。食物神の一般的名称は御食津神であり、中世には神宮外宮の祭神・豊受大神も御食津神と称された。

明治2年に再建神祇官に神殿が作られた。神殿には平安初期と同じ8神が祀られている。明治5年に宣教のみを任務とする教部省ができると神殿は宮中に移された。神殿は現在も宮中3殿の一つとして存続している。明治6年、東京芝増上寺に設置された大教院は、同地で八神殿に代わる神殿の上棟式を行った。大教院神殿を受け継ぐ神道事務局神殿は、明治13年、有楽町3丁目に落成している²⁴。

祀られていた8神は、神産日神、高御産日神、玉積産日神、生産日神、足産日神、大宮売神、御食津神、言代主神である。明らかなように第1殿から第5殿までの重要な神々は全て産霊である。第7殿には御食津神がおわす。食事こそ生命の源であるからということもあるが、御食津神が、近代神道神学のなかで産霊と同一視された産須那神と近い存在とされていることは、本稿での考察にとってたいへん示唆的である。

さらに、久保田エイにその再建が神から託された高塚神社もまた、同地の産須那神社であったことは言うまでもない。

【参照文献】

井上順孝『教派神道の形成』弘文堂、1991年。

佐野経彦『産須爾神考』本教神理教会、1883年。

戸浪裕之『明治初期の教化と神道』弘文堂、2013年。

六人部是香『産須那社古伝抄』菅廼舎池村、1857年。

山中浩之「六人部是香における国学の宗教化」『松兼山論叢』史学篇7、43-62ページ、1974年。

²⁴ 戸浪前掲書、121-132ページ。